様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４３５

研究課題名（和文）現代沖縄社会における自然談話の分析研究

研究課題名（英文）A Study of Okinawan Natural Conversation

研究代表者
高橋　美奈子（Takahashi, Minako）

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０３３６３５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代沖縄社会の人々による自然談話を収集しコーパス化することで、架空のステレオタイプ的イメージではない現実の話しことばの実態を明らかにすることを主たる目的とした探索的研究である。研究成果は主に、（１）沖縄県で言語形成期を過ごした幅広い世代の話者による自然談話データを作成したこと、（２）作成したコーパスを用いて現代沖縄社会の人々によることばの使い分けの一端を明らかにしたことがあげられる。これまで現代沖縄社会の話しことばコーパスが皆無であったことを考えると、本研究の成果として作成したコーパスは、現代沖縄社会の言語運用のさらなる実態解明のために大いなる意義と活用可能性を有するだろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to collect Okinawan naturally-occurring discourse into the database and to analyze their real discourse that is not by the stereotyped image. The following results were obtained: (1) the natural discourse data by the speakers of the wide generation who spent most of life in Okinawa was transcribed and compiled, (2)using the corpus, a part of their discourse functions was clarified. Considering this to be spoken corpus of modern Okinawan society was none, the corpus that was created as a result of this study showed the potential use of a great significance for further actual elucidation of their discourse structures and functions in the modern Okinawan society.

研究分野：言語学

キーワード：自然談話　話しことば　沖縄社会

１．研究開始当初の背景

１．研究の学術的背景

（１）沖縄県は本土とは異なる固有の方言を持っている地域と言われている。そのため、沖縄県での言語研究は伝統的な方言研究、つまり音声・語彙・文法の側面からの地域方言研究ばかりが注目され、現代の沖縄県の人々の談話レベルにおける言語運用の実態を調査した研究は、方言研究と比較すると十分とは言いがたい。

（２）近年は、メディアにおいて沖縄県で使われていることばを耳にする機会が増えたが、同時に、現実とは異なる沖縄方言のステレオタイプ的なイメージが形成されている（田中 2011）。研究代表者はこれまで沖縄県で作られたローカルメディア番組で用いられる話しことばの談話分析を行ってきたが（高橋 2010、2012）、地域アイデンティティー形成の促進を目的とした番組であっても、そこで用いられることばは「標準語＝正統、方言＝異端」という役割語（金水 2003）使用のパターンに則った話しことばであり、そしてさらには標準語による女ことば・男ことば規範が流布されていた。つまり、熊谷（2010）が指摘するように、現代日本の方言は、単純に地域的な差を示す「地域方言」というより、標準語が方言より正式であるという言語間階層差を示し、「社会方言」化していると言え、社会方言の視点からのさらなる研究が急務であると考えた。

（３）現実の話しことばを社会方言の視点から分析するために、沖縄県の中高生および教員を対象とした量的調査（高橋 2005）を行ったところ、使われる人称表現は方言語彙ではないものの、標準語圏の主な人称詞とは語形が異なっており、その運用の仕方も異なっていることがわかった。つまり、語彙が方言語彙でないことにより「かくれた地域差」（国立国語研究所編 2002）として機能している可能性を示唆した。しかしながら、アンケート調査紙による調査であったため、研究結果が現実の言語運用の実態を正確に反映しているとは言い難い。

（４）社会におけることばの規範がいかに実態とは乖離した創作物であるかを明らかにした画期的な研究として、自然談話を収集し分析する方法がある。これまで首都圏における現代の話しことばのデータベースとしては、話し言葉コーパス（国立国語研究所編 2004）、KY コーパス（鎌田・山内 1998）、BTSJ による話し言葉コーパス（宇佐美監 2011）、名大会話コーパス（大曾 2008）、職場の談話コーパス（現代日本語研究会編 1997、2002、2011）など近年豊富にあるが、首都圏以外の地方の話しことばのデータベースをみると、方言学における生え抜き話者の伝統的な方言音声データが主流であり、現代方言における話しことばのデータベースとしては、広島大学（1991～2006）による『方言資料叢刊』（全 9 巻）や国立国語研究所（1978～1987）による『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料 1～10』（全 10 巻）などと多くはない。しかも、いずれも沖縄の方言を扱っているものの、調査が古く、話者も伝統的な方言話者世代であり、現代の沖縄社会で用いられている話しことばとはほど遠い。

（５）よって、本研究では現在を生きる沖縄の人々の自然談話を収集し分析することで、メディアによる架空のステレオタイプ的イメージではない現実の話しことばの実態を明らかにする必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究は、現代沖縄社会における自然談話の実態を明らかにするための探索的研究であり、主な研究目的は以下の 3 点である。

（１）現代沖縄社会の日常場面における自然談話を幅広い世代から収集し、具体的かつ現実的な話しことばの文字化データを作成する。

（２）作成した文字化データを社会言語学的な観点から分析し、現代沖縄社会における話しことばの実態を明らかにする。

（３）作成した文字化データを談話研究の観点から分析し、談話機能等を明らかにする。

３．研究の方法

（１）上述した研究の目的を遂行するために、当初、申請書作成段階の研究計画では、沖縄社会の日常場面における子ども世代、親世代、祖父母世代 3 世代の男女 3 名ずつをベース調査協力者とし、世代差と性差、場面に配慮しながら、約 18 名の自然談話データを IC レコーダーによって収集し、宇佐美（2011）で開発された BTSJ による文字化の原則に従って、具体的かつ現実的な文字化データを作成する予定であった。

（２）しかし、音声データ収集前に予備調査研究を行い、さらに現代日本語研究会を中心とした県内外の研究者らに研究助言ならびに研究協力を仰いだ結果、現在同時進行中の首都圏を中心とした話しことばコーパス（遠藤他編　印刷中）との比較考察を今後の視野に入れて、その方法論を踏襲し、当初の予定より幅広い層の談話収集が妥当であるという結論に至った。調査協力者の選定に際しては、日常場面における録音ということで非常にプライベートな事柄であり、通常は録音が困難な場面であることから、十分な時間をかけて協力者を選定したところ、沖縄県で言語形成期を過ごした 10 代から 70 代までの 7 世代、それぞれ女性、男性各 2 名の計 28 名の調査協力者の方々に協力を得られることになった。調査協力者には、研究の目的や個人情報保護に関する必要十分な情報を説明し、調査協力の承諾書を交した上で、日常生活の中で異なる 3 つ以上の場面を各 30 分以上収録してもらった。3 つ以上の場面は、可能な限り上下、親疎およびウチ/ソト関係の異な

る場面とした。収録の際には、IC レコーダーを用い、録音は自然談話という性質上、研究者による実施ではなく、調査協力者主体で実施してもらった。さらに、調査協力者には、談話分析可能なデータとするために、フェイスシート（調査協力者の出身地、性、年齢、言語背景、職業、家族構成などの調査協力者にかかわる必要情報）と録音した各場面の状況と相手、相手との関係性を記載した用紙を提出してもらった。

（３）収集した音声データは、各調査協力者につき約 30 分～35 分間の文字化箇所を抽出し、計 28 名分の 15 時間 30 分 57 秒間の音声データを専門の文字化業者に依頼し、第１次文字化データを作成した。その後、研究協力者らによる助言、先行研究による文字化の原則の検討ならびに複数の研究協力者らの作業の利便性や効率性、正確性等を踏まえ、本調査の文字化の原則を整えた。それに従って、研究協力者らとともに第 2～4 次文字化改訂作業を行い、文字化データコーパスの精度を高めた。

（４）沖縄社会における社会言語学的ならびに談話機能の観点から談話データを分析するために、予備調査研究を行い、必要な文献収集や文献講読も行った。さらに、学会や研究会等に参加し、研究者らと議論し、情報の収集を行った。

４．研究成果

（１）沖縄社会の母子の談話にみるジェンダー規範意識の解明

現実社会での女性のことばづかいは、必ずしもジェンダー・イデオロギーに従ったものではないことが多くの先行研究で指摘されている。特に、方言主流社会においては、標準語によるジェンダー規範とローカルな規範意識が必ずしも合致せず、地域語としては無標であった語や表現が、標準語規範のものさしで測られると、ジェンダー規範を逸脱する有標性を帯びることがある。それゆえ、方言主流社会の女性の言語選択は、標準語圏のそれより複雑であるといえる。

本研究では、女性の役割として、幼児期から規範意識が最も強固である母親という役割に着目し、実際の母親の発話から抽出した標準語による男性語と同じ語形や表現について、母親の発話意図を考察し、沖縄社会におけるローカルなジェンダー規範意識の解明を試みた。調査データは、本研究の予備調査データとして収集した家庭内談話データ（約 4 時間 40 分）を用いた。

結果として、母親の発話には、標準語では男性語とされる語形「おまえ」や「～だろ？」、発話行為では行為要求表現とされる動詞の命令形や禁止形などの使用が見られた。沖縄県内の家庭内談話における母親は、このような標準語による男性語を用いなければ、子どもとのウチ関係を示すことができないゆえであることがわかった。

もともと琉球方言では男女差が顕著ではない（名嘉真 1991）と言われているが、現代の沖縄社会では、琉球方言語形はローカルなジェンダー規範に照らし合わせると男性語に当たるため、女性には使用が躊躇われる。そこで、標準語による男性語あるいは女性語を選択することになるが、標準語による女性語を用いると、相手をソトの存在と指標してしまうため、自分の子どもに対して親しさを表すには使えない。よって、標準語による男性語を用いて、相手がウチの存在であることを示すのである。つまり、このような標準語による男性語を用いることによって、母子の心理的な一体化を表しているといえる。

（２）沖縄社会の親子の談話にみるフィラーの分析

沖縄社会で日常的によく耳にするフィラーとして「フン」がある。古くからの琉球方言で「フン」は応答の軽い返事を意味するとあるが、実際に「フン」が使用されている談話を見ると、「フン」の機能は返答にとどまらない。そこで、本研究では、沖縄社会における自然談話データを用いて、フィラー「フン」の出現状況と機能を考察した。

結果として、フィラー「フン」は他府県出身者による談話にも出現していることから、「フン」のみでは必ずしも沖縄特有の言語形式とは言えないが、「～さー、フン」の連なりは、沖縄特有の言語形式といえることがわかった。また、フィラー「フン」は必ずしも子ども特有の言語形式ではなく、大人にもその使用はみられた。フィラー「フン」の出現位置と機能を分析してみると、大人と子どもではその用法が異なることも明らかとなった。子どもは「さー」の後に「フン」を用いて、間つなぎ語としての機能で用いる一方、大人は断定や指示表現の後の発話末に「フン」を用いて、聞き手からの返答を許さない注意を強調する念押し機能として用いていた。「さ」に関する先行研究を整理した冨樫（2011：142）によると、「さ」は「聞き手に提示しようとする情報に対して責任を伴った判断（断定）を下していない」という共通した本質があるという。このような責任回避として機能する「さ」に、さらに次の発話を考える間を埋めるための間つなぎ語「フン」を併用することにより、情報処理能力が不十分な幼児の発話を想起させる特徴となるのであろう。

（３）現代沖縄社会における話し言葉コーパスの作成

前述したように、方言主流社会における現代の話しことばコーパスは管見では見当たらない。本研究では、沖縄県で言語形成期を過ごした 10 代から 70 代までの 7 世代、それぞれ女性、男性各 2 名の計 28 名の調査協力者の方々に相手との関係性や場面の異なる 3 場面以上の日常談話を録音してもらい、音声

データ 15 時間 30 分 57 秒間を抽出し、文字化の原則に従って書き起こし、エクセルソフトを用いて、現代沖縄社会の話しことばコーパスを作成した。本コーパスは、研究支援者および専門家の協力も得ながら、文字化の原則を整備・検討し、研究期間中に４度のコーパス改訂作業を行い、可能な限り精度の高い沖縄県話しことばコーパスを作成した。

また、本コーパスには、発話者と発話だけでなく、発話者の年代、性、発話状況、対話者との関係性（親疎、上下等）などの補足情報も付した。

（４）沖縄社会の自然談話を用いた人称表現の諸相の解明

近年、日本語教育において真のコミュニケーション能力を培うためには、母語話者による「自然な」（宇佐美 2012）かつ「本物の」（品田 2012）談話教材を使う必要性が指摘されており、そのためには野田（2012）は母語話者が実際にどのようなコミュニケーション活動を行っているのかを明らかにするための研究が必要不可欠であると述べている。沖縄県は本土とは異なる固有の方言を持つことから伝統的な方言研究が主で、現代の沖縄の人々の言語運用の実際を調査した研究は方言研究と比較すると十分とは言えない。そこで、本研究では現代沖縄社会における自然談話データを用いて、首都圏を中心とした言語選択とは異なる沖縄の人々による使い分け－人称表現・自称詞の使い分けの実際－について分析考察した。

結果として、沖縄社会で用いられる自称詞の語形や各語形が指標する意味や機能は、全国共通語とは必ずしも同じではないことが明らかとなった。その理由の一つには、自称詞の使い分けが相手との上下関係や親疎関係による相対的な待遇意識によるのではなく、琉球方言から伝わるウチ・ソト基準による意識の名残が考えられる。一方で、現代社会ではソトの人間が必ずしも疎の相手とは限らない。また、選択する語形についても、方言語形だけでなく全国共通語の多数の語形を持ち合わせている。このことから、親しいソトの相手に対しては、一貫しない文体や多種の語形を使用することによって、その複雑な関係性を指標しているのだと考えられる。本研究では自称詞という一つの品詞のみの分析に留まったが、今後、文末表現や発話機能、談話構造など多様な観点で談話データを分析考察することにより、メディアでは見られない現代沖縄社会の言語運用の実態が明らかとなり、日本社会における言語運用の多様性を解明できるだろう。

以上の４点が本研究課題の主な研究成果である。

これまで現代の沖縄における話しことばは、メディアによる創作されたことばや新聞やマンガなど書かれたことばによるものが主であったが、本研究は、幅広い世代の沖縄社会の人々による自然談話を収集しコーパス化したことで、メディアによる架空のステレオタイプ的イメージではない現実の話しことばの一端を解明した。小磯編（2013）が指摘するように、話しことばコーパスの設計と構築は、その話しことばレジスターの多様さ、複雑さによって、ある母集団の日常生活における話しことばの代表性・均衡性を持つコーパスを作り上げることは容易ではない。本研究においても、その方法を検討し、データを整備することに、当初計画していた以上の時間を要してしまったが、これまで幅広い世代を網羅した現代沖縄社会の話しことばコーパスが皆無であったことを考えると、今後、本研究の成果として得られたコーパスは、現代沖縄社会の言語運用のさらなる実態解明に向けて、大いなる意義と活用可能性があると考える。

＜引用文献＞

・宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj_corpus_explanation.htm
・宇佐美まゆみ（2012）「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版　pp.63-82.
・遠藤織枝他（編）（印刷中）『談話資料　日常生活のことば』ひつじ書房
・大曾美惠子（2008）『名大会話コーパス』http://tell.cla.purdue.edu/chakoshi/meidai-chuui.html　（平成 13 年度～15 年度科学研究費基盤研究（B）（２）「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」研究代表者：大曾美惠子）
・鎌田修・山内博之（1998）『KY コーパス』日本語 OPI 研究会
・金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
・熊谷滋子（2010）「３　方言の歴史－若い女性が東北方言を使いにくいわけ」中村桃子（編）『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社　pp.50-63.
・現代日本語研究会編（1997）『女性のことば・職場編』ひつじ書房
・現代日本語研究会編（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房
・現代日本語研究会編（2011）『合本　女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房
・小磯花絵（編）（2013）『講座日本語コーパス　３．話し言葉コーパス　設計と構築』朝倉書店
・国立国語研究所編（2002）『国立国語研究所報告 118 学校の中の敬語１アンケート調査編』三省堂

・国立国語研究所編（2004）『日本語話し言葉コーパス』国立国語研究所
・品田潤子（2012）「コミュニケーションのための日本語教育の方法」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版　pp.147-166.
・高橋美奈子（2005）『沖縄県における人称表現の実態調査』平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金若手研究（B），研究代表者高橋美奈子，課題番号 14710376，研究成果報告書
・高橋美奈子（2010）「沖縄生まれの戦隊ヒーローの話しことばにみる性差－人気テレビ番組『琉神マブヤー』の文字化資料の分析より」、『ことば』31 号　現代日本語研究会 pp.89-112.
・高橋美奈子（2012）「なぜ方言を話すヒーローは女性なのか－方言特撮ドラマ『ハルサーエイカー』の分析から－」　『ことば』33 号　現代日本語研究会　pp.5-19.
・田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代　ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店
・冨樫純一（2011）「終助詞「さ」の本質的意味と用法」『日本文学研究』50　大東文化大学日本文学会　pp.138-150.
・名嘉真三成（1991）「方言にあらわれた男女差－琉球方言」『国文学　解釈と鑑賞』56－7　至文堂　pp.90-96.
・野田尚志（2012）「日本語教育に必要なコミュニケーション研究」『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版 pp.1-20.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 高橋美奈子、現代沖縄社会の自然談話からみる人称表現の諸相、2015 年度日本語教育学会秋季大会予稿集、有、2015、288-293
② 高橋美奈子、沖縄県の自然談話に見られるフィラー「フン」、ことば、有、35 号、2014、65-81
③ 高橋美奈子、母親という役割からみる話しことばの実態－現代沖縄社会における自然談話データの分析から－、ことば、有、34 号、2013、15-28

〔学会発表〕（計 3 件）

① 高橋美奈子、現代沖縄社会の自然談話からみる人称表現の諸相、2015 年度日本語教育学会秋季大会、2015 年 10 月 11 日、沖縄国際大学（沖縄県・宜野湾市）
② 高橋美奈子、現代沖縄社会における話しことばデータコーパス構築の意義と課題、沖縄県大学等日本語教育研究会第 12 回大会、2015 年 2 月 28 日、琉球大学留学生センター（沖縄県・西原町）
③ 高橋美奈子、現代沖縄社会における話しことば研究の視点－自然談話研究の分析から－、現代日本語研究会第 22 回武蔵嵐山ワークショップ、2013 年 8 月 4 日、国立女性教育会館（埼玉県・嵐山町）

６．研究組織

(1)研究代表者

高橋　美奈子（TAKAHASHI，Minako）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：　0336352